

## 固定した磁石：小説

著者	大森， 正
雑誌名	龍南
巻	2 1 9
ページ	5 3 - 9 8
発行年	1931-11-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7038">http://hdl.handle.net/2298/7038</a>

# 固定した磁石

大 森 正

電話のベルが、午後の静寂を破つて鳴り渡つた。

ぼんやり廊下に揺れてゐる梧桐の影を見つめてゐた山野さんが、立上つて受話器を取上げた。

「何？」

「又、入院患者。」

「どちら？」

「第二内科。」

「それぢや私ね。」

吉岡さんは読みさしの婦人雑誌を置くと、ゆつくり看護室を出て行つた。

ちよつと腕を翳して、時計を覗き込んでから山野さんはよく響く聲で、

「片山さあーん。検温ですよ。」と叫んだ。

入院室の方で

「はあーい。」と長い返事が聞えて、呼ばれた人が看護室に這入つて來た。

「もう三時ですね。うつかりしてた。」

と言ひ乍ら、十本許りの体温計と検温表を抱えて出て行つた。再び、看護室には夏の午後の静寂がやつて来て、日當りの餘りよくない室の中は薄暗く、薬品の臭ひが蒸れてゐた。山野さんは机に俯すと、昨夜餘り眠れなかつたので、うつら／＼やりだした。ぼんやりとなつて行く頭の中に、まだ昨夜宵の口に死んで七號室を出て行つた人の顔があり／＼と刻み込まれてゐた。寂しく未だ結婚もせずに、清淨な處女の白衣に包まれて、永久に清淨な土地に生れて行つた、あの女の人!! 瘦せて瘦せ切つてはゐたが、美しかつた顔立ち、眸、唇!! 何も彼もが全く清淨な、そして聲迄が鈴のやうに美しかつたあの女の人に、山野さんは思はずも合掌したんだ。そしてその夜寄宿舎に歸つて床の中に這入つても山野さんは絶えずあの人の顔を胸の中に描いては消し、消しては描きして、その度に山野さん自身を織り込んで對照してみた。山野さんは何度も溜息ついた。あの人と自分とに雪と泥のやうな違ひがあるのを認めてゐる。

處女だとか、貞操だとか、全で壁一つ距てた向ふの世界のことのやうに感じて、平氣で男と、それも數人の男と交際して來た山野さんには、今初めて貞操の崇高さと處女の美しさが分つた。壁一つ向ふの世界のことではなくて、余りにも身近い存在であることに氣が付いて何か大きな忘れ物でもして來たかのやうに、すつかり驚いて了つた。しかしその忘れ物が再び手に入るものでないことを、山野さんはどんなに悲しい思ひで諦めねばならなかつたか。どんなに憤らしい思ひで男達を呪はねばならなかつたか。

山野さんは一夜中まんじりともしなかつた。そして夜明方やつと總べてを諦め切つた冷い涙を拭いた。清々しい朝の空氣の中で信仰に生きやうと思つた。

「山野さん、山野さん。」

「あ、室長さん、濟みません。」

「早へ脈を診て了はなきあ。」

「え。」

山野さんが出て行くと、室長さんは静かに山野さんが坐つてゐた椅子に腰掛けた。そして吉岡さんが讀み掛けて伏せといった雑誌を起してバラ／＼頁をめくると舌打ちして床の上に突き落した。

「此處が看護室です、ちよつと待つて下さい。」

吉岡さんが處方箋を机の上に置かうと室に這入ると、室長さんは邪慳に顔を突き出して隅の棚を指した。吉岡さんはでも微笑んで處方箋を其處に置くとすぐ出て、入院患者を案内して二號室に這入つて行つた。山野さんが入口に一番近い患者の脈を取つてゐた。

「低氣壓ね。」

「低氣壓ね。」

どちらからともなく小聲で呟いて同じやうに首を竦めた。そしてやはりどちらからともなく微笑を交した。

新入院患者はベツトの上に坐ると、きつさうに一つ溜息を吐いて、そつと羊のやな眼で室内を見廻した。そして山野さんの眼とぶつゝかると忙てゝ俯いた。

「着物を着替へて、およりになつたらいいでせう。」

吉岡さんはさう言ふと、そゝくさと出て行つた。

「どれ脈を見ませう。」

新入院患者は恐る恐る手を出すと、そつと山野さんを見上げて、ぼつと赧くなつた。

「御病氣は？」

「まだはつきり分りません。」

「中學ですか？」

「は。」

「何年？」

「四年生。」

「誰もおいでにならなかつたんですか。」

「いゝえ、父が来てゐますが、賣店で買物してゐます。」

「さうですか。着物を替へてお寝みなさい。」

山野さんに手傳はれて着物を替へると、氣味惡さうにベットに横たはつて、新入院患者は所在なさうに手を組んだり、ほどこいたりしてゐた。

「お名前は？」

「獨活。」

「獨活さんですか、あゝさうですか。」

その時、檢温を終つて、片山さんが二號室の前を通り掛つた。

「片山さん、こちらに、も一人。」

山野さんは片山さんと代つてその室を出た。

山野さんが看護室に歸つて來ると、神谷先生が聴診器を振り乍らひよつこり看護室を出て來た。

「おや、廻診！」

「ぼんやりしてゐるなよ。」

神谷先生は受持の患者だけ無雜作に次々と診て行つた。

「どうです。變りありませんか。」

神谷先生は、病室に這入つて行くと、きつとかう言ふ。獨活の室を神谷先生が出て行つて了ふと、

「ハウ ドウル、ドウ。」

と獨活の隣の患者が、その向ふの患者とさう言つて顔見合して笑つた。その時、嵯峨は何のことかちよつと見當がつかず、何だか自分のことを笑つてゐるやうな氣がして、嫌な、寂しい氣持になつた。

患者の夕食が済んで、やつと飯が看護室に運ばれると、室長さんも、山野さんも、吉岡さんも、片山さんも、それから診察間の方の掛りの、渡邊さんも、齊藤さんも、松田さんも、關田さんも、一緒に家庭のやうに圓く座つて食事を始める。

皆が餘りきちんと座つて、眞面目くさつた顔して、飯を食つてゐるのを、吉岡さんがいつも見てクス／＼笑ふ。笑ひはすぐ傳染して、室長一人濫い顔をする。そして白い眼が、じろりと吉岡さんの額を射る。一同が首を竦める。しかし、一日の働きで腹が空いた人達の食慾は健かである。無言の中に、出来るだけ貪り食つて、銘々、食器の始末をすると、代り番で、風呂浴びに行く。

山野さんは便所に行つて、歸りにそつと七號室を覗いて見た、中は薄暗かつた。殘光に仄かに浮いてゐるベットには、まだ主がなかつた。

何思つたか、山野さんは、そつとその室に這入つた。そして冷たい床に坐ると、掌を合して、首をたれた。山野さんの眼はしつとり濡つて見詰めてゐる床の隅が微かに震へた。

「隆子さん、幸多く、幸多くして、逝つて了はれた隆子さんに、私は心からの美みを覺えます。人間の醜い慾望を知らずに、そしてその慾望に仄かな憧憬をさへ抱いて、旅立たれた隆子さん!!何と云ふ幸でせう。美みます。でも私には、この仕事着の汚點しみのやうに、身にも心にもしみ込んだ獸的の汚辱を背負つてゐる私には、美む資格がありません。かうして、ちつと掌を合してゐると、隆子さんのあのお美しい笑みが見えます。私は恥かしい。隆子さん。でも、此の身の汚れは直らなくとも、心、私の心だつて女の心ですもの、清い心に直りませうね。此の仕事衣もこんなに汚點が多くなりました。明日新しいのと替へます。と同時に

に私の心も眞白に致します。」

その時、外の廊下を獨活が、弱々しい足取りで通つて行つた。山野さんはそつと立上ると、扉の把手に手を掛けたまゝまたぼんやりと考へ込んだ。

看護室では、室長が風呂に出掛けて行つたので、急に賑かになつた。關田さんの頓狂な聲が、山野さんのところ迄聞えて來た。

「何騒いでるんだらう。」

と咳き乍ら、やつと山野さんは、その室を出て來た。其處に丁度、獨活が再び通り掛つた。

「お寂しいでせう。」

「いゝえ。」

「嘘!!。」

「……………!？」

「嘘でせう!？」

「えゝ。」

「御覽なさい、あんなに夕焼してゐる。今日の日ももう暮れるのですね。」

山野さんはさつさと看護室に歸つて來た。

「何騒いでるの。」

關田さんと、片山さんと、又頓狂な笑聲を上げた。

「何?。」

「これ、御覽。」

關田さんは手に持った紙片を見せて、

「可笑しくない?。」

「何?。」

「室長の……。」

二人は又笑つた。山野さんも釣込まれるやうに苦笑して。しかし心から笑へなかつた。紙には室長の筆で克明に男の名を書き附けてあつた。そして處々に「ひどい、ひどい」とか「懐しくて」とか書いてあつた。脊が低くて、色が黒くて、鼻がひしやげで、頬骨の出張つた、どう見ても好い女には見えぬ室長でも、やはり年を取ると段々人が戀しくなるんだ、と何だか淺間しい氣持さへ起つて來た。

「そんな紙を何處から見附け出したの。」

「此の硯の下。」

「ぢや、元のやうに入れてお置き。」

又二人は笑つた。さうして、山野さんが笑はぬのを物足らぬやうに、そつと下から仰ぎ見た。

そこに吉岡さんが風呂から上つて來た。二人はその紙を吉岡さんにも見せた。吉岡さんも餘り笑へなかつた。二人は輕く失望して紙を元のところに戻した。三つも年下の二人には、山野さんとか、吉岡さん等の氣持が全然分らなかつた。吉岡さんはその紙片を見て、ふと昔の丑の刻詣りのことを思つた。こんな室長のやうに醜い、しかも蛇のやうな執念を持つ女が、棄てられたその男を呪つて、一七日間の間毎晩、丑の刻になると、頭の上に蠟燭を灯して、犬の子一匹ゐない深夜の森の中の社に詣で、男の形を蠟人形に拵らへ、それを神木に、釘で打ち附ける。すると呪はれた男は死ぬと云ふことである。吉岡さんは、頭に蠟燭を灯した室長を思ひ浮べに見た。眞暗な、落葉で埋つた、社への石ころの多い坂道を、ガサ／＼登つて行く室長、頭上の蠟燭が流れて、髪の毛が四五本宛固つてゐて、その先から?猶流れ落ちる蠟が、額迄やつて來て、眉毛も固らさうとしてゐる。それでも、



呪ひに釣り上つた眼を猶一層見開いて、鰐人形を、杉の太木に打附けてゐる室長!! 吉岡さんは怖ろしさうに身震ひして、その幻像を打壊すと、

「二人とも馬鹿ね。もうすぐ室長も上つて来るのに、見付かつたらどうするの。又低氣壓が何日も續くぢやないの。」  
と言つて、二人がその紙片を元の處に戻すのを見てゐた。

食器運搬車が、看護室の前を小さな音を立てゝ通り過ぎた。だん／＼暗が濃くなつて行く。

「山野さん、今夜出ない?。」

「何處?。」

「百樂園。」

「出てもいいけど、今夜少し眠いから。」

「さう、渡邊さんも行くんですよ。」

「齊藤さんは當直ね。」

「え。」

「私は風呂を浴びて、寄宿舎に歸つて直ぐ寝やう。昨夜ちつとも眠れなかつたから。」

「さう、ぢや私も、行くまいかしら。」

「思ひ立つたら、お行きなさいよ。」

室長が歸つて來た。關田さんと、片山さんは下を向いに、一心に笑ひを堪えてゐる。室長は火照つた顔をタオルで拭くと、鏡の前に座つて化粧し始めた。關田さんと片山さんは堪え切れなくなつて、廊下に飛び出した。一砌り苦しうな笑ひが聞えた。室長は顔を上げて、ちよつと眼を白くしたが、すぐ忙しさうに睫毛を上下に動かした。

山野さんは石鹼やら、何やら取出すと、ゆつくり看護室を出て行つた。吉岡さんも室長の隣りに座つて、化粧し始める。

「何處かに行くの?。」

「えゝ、百樂園に行かうかしらと思つて。」

「誰と?。」

「渡邊さんと。」

「お樂みね。」

「.....。」

吉岡さんはちよつと眉を上げたが、すぐ元に戻して、ニヤリと笑つた。室長は完全に侮辱された。でも知らなかつた。タオルを顔に當て、白粉をおさへてゐた。

「室長、意地悪な皮肉は損よ。倍にもして復讐されるぢやないの。オールド・ミスの腦みはやはり自分一人で紙にでも書いといた方が、どれだけ見よいか、知れやしないわ。」

吉岡さんはそんなこと思つて、ニヤ／＼笑ひ續けた。

「室長さん、今度の土曜に小劇場が來てるから、見に行きませんか?。」

「面白くもない。」

「好い男がゐますよ。」

「逢ひ度いの?。」

「えゝ。」

「.....。」

「だつて、逢へるもんですか。」

「逢へないくせ、見に行つて、唯遠くから見ただけ?。」

「え、それで結構です。満足です。」

「つまりな。」

吉岡さんは、

「ぢや、抱いて貰ひ度いの。」

と言はうと思つたが止した。白い眼で睨まれて、好い氣持はしないから。

少時の間、二人は黙々と化粧し續けた。關田さんと片山さんは、何處に行つたか、ちよつと歸つて來なかつた。

獨活はベットに長くなつて、感傷的な日記を認めてゐた。何時迄も眠くならぬので、書けるだけ書いた。書き乍ら、何度もためらつて、やつと隣の人に山野さんの名を訊いた。獨活の顔はぼつと赭らんでゐた。隣の人は山野さんの名を教へると、自分の名も教へた。隣の人の名は洋村と言つた。獨活は日記に二人の人名の前を書き込んだ。二人とも好い人だと思ひ乍ら。獨活は洋村さんと十一時頃迄話して知らぬ間に眠つてゐた。

翌朝五時頃、片山さんが検温に來たので、獨活はそれなり眼を醒した。

夏の末だが、窓から吹き入る風は、胸を寛げてゐる獨活には冷たく感ぜられた。顔を洗つて、又ベッドにもぐり込んで、ぼんやり天井を眺めてゐると、いろ／＼の追憶が頭を持上て來た。未だ明けきれない此の十六坪許りの部屋に、二十五燭光の電燈がぼんやり赤ちやけた光を投げてゐる。洋村さんも、誰も、まだ眠つてゐる。

山野さんは昨夜九時に眠つたぎり、身動き一つせず寄宿舎の一室に六時迄眠つた。誰も起き出で、一人取残されたまゝ、山野さんは始終微笑み乍ら熟睡してゐた。戸の隙間から泌み込んで來る朝の光は、薄暗い電燈の寢床けたやうな光と合して、山野さんの微笑みの上を踊り狂つた。やつと山野さんは眼を覺ました。

「ま、どうしたんだらう、此の手は。マ、の乳房をでも捜すやうな様子で。ホ、ホ、ホ、ホ。『マ、さん』つて、もう私にはとても言へもしないのに、乳房を捜したりして、すっかり可笑しな朝。オヤ、皆起きて了つてる。もう何時かしら。——六時。すっかり朝寝坊しちゃつた。」

忙てゝ起き上ると、夜具を藏<sup>しま</sup>ひ始めた。昨日の朝のやうに力ない顔でなしに、今生れた許りの赤ン坊のやうに、生氣に満ちてゐた。夜具はすぐ片付いた。障子を開けて出やうとした時、山野さんは細い廊下の眞中に一つの手紙を見附けた。取上げてちよつと表を見ると、墨で大きく、關田みつ子様と書いてある。山野さんは裏を見てはならないと思つたけれども、どうしても見ずには置けなかつた。裏には、唯日としてある。山野さんは悪いものを見たと思つて、忙てゝ眼をそらすと、その封筒を懷<sup>ふところ</sup>に藏<sup>しま</sup>ひ込んだ。

「關田さんて阿呆ね、こんなもの失つて。人に見附かつて、中でも見られたら、どうする心算なんだらう。」

山野さんは大急ぎで顔を洗ふと、洗濯して純白になつてゐる仕事着（それを或る剽<sup>うす</sup>撃<sup>げ</sup>者が、大禮服と言つて以來、誰でもがさう呼んでゐた——）を着て、病室の方に出掛けて行つた。仕事着の衣嚢<sup>いなん</sup>にあの手紙を入れて。

夏の朝のみが持つ、あの心地好い冷涼に包まれて、病院の朝は物靜かである。幾つかの病室を持つてゐる、各棟と棟の間にある芝生は、充分朝露を吸つて、新鮮な外光の中に、瑞々しい色彩を投げてゐる。

「今日も好いお天氣だ。」

顔を少し仰向かせて、艶々した、長い廊下を、山野さんは、元氣よい步調で歩き乍ら、かう呟いた。一步毎に、スリッパを愉快さうに踊らしつゝ。

芝生には、もうリーバーが獨り露に濡れ乍らぢやれ廻つた。

「リー。」

犬は飛んで、山野さんの覗いてゐる窓の下に來た。

「ペー。」

犬はワンと吠えた。

「お馬鹿さんね」

山野さんはそのおどけた顔を見詰め乍ら、その名の由來を思ひ出して、クツ／＼と笑ひ出した。

その犬は病院の傍に棄てられ、いつか病院の中に這入り込んで、患者達の食ひ残りの肴や何か恵んで貰つて、大きくなつたんだが、非常に人なつこくて、病院の中の誰からも可愛がられた。或時等、病室の中に連れ込まれて、ベツトの下に一夜を明かしたことや、余り毛が汚くなつたからといって、掃除婦に湯浴み迄して貰つたことがあつた。窓から顔さへ出してゐたら、どんなに知らない人だらうと、尾を振つて飛んで來た。そんな時、又向ふの病棟で「リー」とでも呼んでやると、飛び上つてそつちに走つて行き、今度、こちらで「ペー」と呼ぶと、又くるりと廻つて馳せ寄つて來、何度でも繰り返されて、終ひには眞中に腹這つて、舌を出して呼吸した。その顔が又とても素敵なので、誰も思はず嘔飯した。無聊に苦しみ、苦しみ抜く患者には、全く好いお友達だつた。そんな風で、食料は缺けず、丸々太つてゐた。

或る時、こんなことがあつた。小使に一人、面白い男があつて、その犬に手紙を一つくゝりつけて、その犬を或掃除婦への文使ひにした。偶然にも、手紙はその女が受取つたので、何の事が書いてあつたか、分らなかつたけれども、何時か、その犬の名が「リーペー」で通るやうになつた。

「山野さん、お早う。」

「あ、お早う、關田さん。」

山野さんはちよつと、前後を見廻した。

「リーちゃん。」

關田さんが、さう、ちよつと甲高い聲で叫んだ。山野さんはちつと、關田さんの顔を見詰めた。關田さんの顔には、何處にも

手紙を失つた、と云ふやうな暗さがなかつた。洋村が何時かさう言つたやうに、海の中から、躍り出た初日のやうな、そんな朗らかな顔であつた。しかもまだ、女と云ふ性<sup>セウキス</sup>をさへも自覺してゐないやうな、あどけなさがあつた。山野さんは何だか拍子抜けの感じがした。誰も見てゐる人がゐないので、山野さんはあの手紙を關田さんに返さうと思つた。しかし、どんなに關田さんが今、あどけない顔してゐても、あれを見せたら、きつと顔を赧くするに違ひなからう。見せずに破いて焼いて了つたら、それが一番好いことらしく考へられる。だが、關田さんは手紙を失つたことも、知らないかも知れない。

「關田さん、あなた今朝手紙を落しはしません?。」

「いゝえ。」

關田さんは知らなかつた。で山野さんは焼いて了つたら猶悪いと、考へ附いた。

「此の手紙、あなたのでせう。」

「え。」

關田さんの顔には、何等狼狽の色は表れず、唯怪訝<sup>けげん</sup>さうにしてゐた。

「Hつて、どなた?。」

「兄さんです。」

「兄さん? あなた、確かお一人ではなかつたですか。」

「えゝ。」

「それでは、可笑しいでせう。」

「いゝえ、私の兄さんにその人がなつて呉れたのです。」

「さう。兄さんつてどんな意味かしら。」

「私にも分りません、よく。」

「あなた、その人を好いてゐるんでせう。」

「え。」

關田さんの表情には猶怪訝さが少しと、内氣な小學生が先生に何か尋ねられて、答へ切れずにゐる時の困惑が少し含まれてゐる。

其處に、外科の古島さんが、大股に、女にしては勇敢過ぎる程活潑に歩いて來た。

「やあ、山野さん、お早う。景氣はどう？　もう一週間、御ぶちやんね。此の前、余り喋舌り過ぎちまつて、さう、一週間分一度に喋舌つちまつたもんだから、御用無しね。今夜どう？」

「當番よ。」

「ぢや明日ね、明日の晩何處かに行きませう。」

「え。」

リーベーがワンと吠えた。

「おや、リーちゃんがある。どうしたのリーちゃん、ちゃんと坐つて。」

「私が余り話に夢中になつてたものだから、リーの奴しうことなしに、さうしてるんですよ。」

「まあ、可愛さうに。」

古島さんが行つて了ふと、山野さんはぼんやり立つてゐる關田さんの肩に、軽く手を置いて、

「ね、關田さん、今夜ゆつくり私にそのお話、聞かしてね。いゝ？」

「え。」

關田さんの顔には、もう怪訝さも、困惑もなかつた。山野さんはちよつと何だか見當がつかなくなかつた。きつと何かあるに違ひはないと思ひ乍らも。

少し軽い患者は皆一様に、飯の来るのを、首を長くして待つてゐる。皆のお腹は空いて了つて、どんな拙いものでも、旨く食へさうな氣がする。しかし、飯はちよつと來ない。朝の飯は八時にならなければ出來ないから。獨活は床の中でぼんやりし乍ら泌みるやうな空腹を感じた。昨日入院して來た許りで、一向晩飯が食へなかつたので、猶のこと空腹だつた。獨活の空想は何處迄も伸びて行つた。幼時に遡つたり、級友に微笑み掛けたり、未來に胸をときめかしたり。しかし、事件が頭の中を馳せ巡る割には、時間はたゞなかつた。

その間に、掃除婦が室を綺麗に掃除した。

もうその頃になると、患者達は皆眼を覺まして、洗面所は急に賑ひ初めた。廊下をいろんな人が行つたり來たりした。片山さんも、先刻からもう何度も通つた。吉岡さんも通つた。室長も通つた。遅れて、山野さんも、關田さんも、無性に忙しさうな、それだけ元氣に満ちた歩調で往復した。彼女達はそんなに勞働を、早くて午後の六時迄、當番で遅いものは十二時頃迄も續けねばならない。

けれども、皆、非常に元氣である。大概丸々肥つてゐる。それは、よく食つて、よく働く、と云ふ平凡な理由からである。しかし、それでも、肋膜炎だとか、肺炎加答兒だとかに、此處の病院で、一等看護婦の免狀を取る迄、四ヶ年間に一度は、大低の人が罹病した。中にはその爲に、あたら舊を朽ちさせて了つた人もあつた。

獨活は待ちに待つた飯が、案外拙かつたので、少々落膽した。それでも、どうやら腹だけは満すと、腹這ひになつて、知人達に、入院通知の端書を、熱心に書いた。

窓の外で、梧桐の青い太葉がゆつくり搖れて、その下を掃除人夫が大きく箒を使つて掃いてゐた。西瓜の皮や、梨の芯や、葡萄の種子や、半分食ひ缺いだ干菓子やが踊り狂つて一處に集つて行つた。すると、その後に、一心に食料を巢に運んで行かうとしてゐた無數の蟻が、縦横に駆けずり廻つた。獨活はうつとりと、ペンを止めて、箒の先を見詰めてゐた。今書いてる端書を受取つて呉れる人の、あの無邪氣な口許と、澄んだ眼とが示す愛くるしさを想起し乍ら。



その夜の當直は、關田さんと、山野さんと、渡邊さんだつた。渡邊さんは先に寢て了つて、もう十一時過ぎだつた。黽<sup>け</sup>貼<sup>ち</sup>か何か、唯、もう無暗に鳴いて、夏とは言つても、寒い程の涼しさだつた。

しばらく沈黙が続いて、重苦しいやうな氣持になつて行くのを、山野さんば感じて、口を切つた。

「關田さん、で、あなたはそのHといふ人を、戀してゐらつしやるのぢやないの。」

「いゝえ、私、戀つてどんなものか、よく分りませんけれど、そんなものではないと思つてゐます。唯のお友達だと思つてゐんです。」

「でもあなた、大變お好きだつて、先刻言つてたでせう。」

「えゝ、好きです。誰よりも好きです。」

「では戀と言つて悪いかしら。」

「でも、あの人は決して戀ぢやないと言つてゐましたもの。『私が男で、あなたが女だといふ、そんな性<sup>セツク</sup>の區別なんかないんだ。私達の關係は、そんな私が男で、あなたが女だつていふ區別は要らないんだ。男でも、女でも、何でもいゝんだ』つて。私もさう思つてゐますね。」

「私にはすっかり分らなくなつてしまつた。でも、それが何であれ、美しい、清いことであることだけ分ります。あなた達は美しい人達です。私、美しい。」

關田さんの顔はちよつと興奮で赤くなつてゐたが、やはりいつもの朗らかさがあつた。何も冒すことの出来ない神聖さが、白い額の上に、ピチ／＼躍つてゐるやうだつた。

又沈黙が來た。山野さんの眼は、ぼんやり十六燭の電燈を見詰めて動かなかつた。聽て、光條が大きくぼんやりなつたかと思ふと、山野さんの頬に、熱い涙が傳はり出した。それでも、拭はうともせず、眼を動かさなかつた。

二人の間には、一種、何とも言へないやうな氣分が漲つた。押つけられるやうな悲しさではあるが、その中に甘さを含んでゐ

るやな、關田さんも、もうその空氣に堪え切れなくなつて、やはり涙を零し初めた。果ては、すっかり顔をテーブルの上に押附けて了つて、シク／＼泣いた。

山野さんはやはり、涙の一杯溜つた眼で、小刻みに震へてゐる關田さんのふつくらとした肩を見詰めた。そして思はずも椅子を立ち上ると、つか／＼關田さんの背後に廻つて、後方から關田さんの肩に手を掛けて、もう堰を切られた水のやうに、涙が後から後から零れ落ちた。二人は夜の静寂に包まれ、何時しか固く手を握り合つた儘、何時迄も何時迄も泣き續けた、甘い涙が、温く一つに結ばれた心と濯ぎ掛けた。

平凡で、退屈な日が段々立つて行くと共に、獨活は病院内の空氣に馴れて、落著いて行つた。見るものも、聞くものも、それと共に段々珍らしくないやうになつて來た。初めの中は、何だか怖いやうな氣持さへ持つて、受けた、部長の廻診も、後では何等の拘束なしに、症狀を聞かれる儘に報告することが出来るやうになつた。初めて部長の廻診があつた時、獨活はすっかり面喰つて了つたのだつた。五六人の助手と、三四人の看護婦を後ろに従へて堂々這入つて來た部長を見た時、小さな獨活は、もう動悸を打たしてゐた。順が來て獨活を診察しながら、何度も首をかしげてゐた部長は従つて來てゐた、掛りの神谷先生に、獨活の胸部のレントゲン寫眞を撮るやうに命じた。その翌日獨活は、山野さんから、今日レントゲン寫眞を撮ると云ふことを聞いた。

「で、すぐにお金を拂はねばなりませんが、今十圓お持ち合せてですか?。」

獨活は、丁度持合してゐなかつた。

「たしか、市内でしたね、あなたのお家は。」

「えい。」

「電話、御座居ませんか?。」

固定した磁石

「えい。」

「御近所には？」

「少し遠いけど、あるにはあります。」

獨活は、よく、米とか味噌とか買つてゐる店を思ひ出して、そこから取次いで貰はうと思つた。

「では、電話掛けて、持つて來てお貰ひなさい。」

山野さんは獨活を、看護室に連れて行つて、電話の前に立たした。しかし、もじ／＼してゐる獨活を見ると氣を利かして、先方を呼び出して呉れた。

「さ、早く。」

生れて初めて、電話と云ふものを掛ける獨活は、お／＼受話器を受取つたけれど、却々要領を得なかつた。

「よく分りませんから、代つて下さい。」

山野さんは、微笑み乍ら、再び受話器を耳にあてた。

そんな、ほろ苦い思ひ出も、だん／＼薄れて來て、獨活には、唯平凡な日が続いた。さうして、居ても、立つてもゐられないやうな、退屈から來る焦慮を覺ゆることが度を重ねた。

そのうち、リーベールとも、随分仲好しになつた。本を読むのに、飽き切つた午後等、庭に下りて行つて、リーベールと疲れる迄巫山戯合つた。轉んでリーに頬邊を嘗められたこともあつた。初めは、嫌な感じがしたけれども、後には、リーの首つ玉を抱いて、さうしてわざと嘗められたことも、一三度ではなかつた。何時か、そんな情景を、片山さんが病室の窓から眺めてゐて、

「まあ、獨活さんつたら嫌な人ねえ。汚らしいわ。」

と言つて、走つて、庭に下りると、丁度、そこにあつた棒片で、いやと言ふ程リーを毆つた。リーは頓狂な眼を、不思議さうに睨つて、でも尻尾は振り乍ら、獨活の後に隠れた。

「獨活さん、汚いのに。」

「え!？」

「汚いぢやないの。早く室にお歸んなさい。検温ですから。」

「暴君!!。」

「え?。」

「片山良子は暴君だ。」

「何故?。」

「こんな大人しい奴を。」

「あら、大人しいつて、大人しいもんですか。リーは生意氣なのよ。」

「馬鹿!!。」

「どつちだか。」

「愛情の無い奴が馬鹿だ。」

「あたし驚いた。」

「そんな奴は、犬とも遊んで貰ふ資格がないんだ。」

「お止し! もう、それはそれでいゝから、室に歸りませう、ね。」

片山さんは獨活の手を取ると、がくと、一つ引き寄せといて、急ぎ足に歩き出した。そして、

「ほんとに、どつちが馬鹿なのでせう。」

「分つてゐる。」

「勿論、あたしでせう?。」

「うん。」

四五歩歩いて、獨活がそつと片山さんの横顔を覗いて見ると、涙が一杯で、今にも零れ落ちさうにしてゐる。

「片山さん!」

「……………?」

「片山さん。」

「え!」

「片山さん、御免なさい。僕、人間が少し好すぎるんです。」

「いゝえ、いゝのよ。でも、私にだつて愛情はあつてよ。」

「さうだらう。よくも犬が打てたからね。」

獨活は、勢ひさう言つて了つた。

「さうよ。犬ぐらい打てゝよ。」

片山さんは、たう／＼手巾で眼を押へて了つた。

「濟みません。」

獨活はさう言ふと、急につないでゐた手を振り放して、後をも見ずに室に這入つた。

翌日、山野さんは、非番なので、古島さんと外出することにした。

「關田さん、一緒に行かない?」

「でも。」

「でもつて、古島さんはあゝしてゝも、ほんとに好人だから、仲好しになつといたつて、損はありませんよ。」

「ようね。」

「行く？　ねえ、行きませう。」

「えい、ぢや連れて行つて下さう。」

二人は仕事衣を、皆派手な着物に着替へると、誰でもが味ふやうに、牢獄を釋放された人のやうな喜びと希望を抱いて、彼女達が唯一の仕事としてゐる、その仕事場を出て行つた。

「何處にしようね。」

「藝館はどう？。」

「賛成。」

「關田さんもう？。」

「えい。」

二人は賑かな通りを、ずん／＼歩いて行つた。

「もう秋ね。御覽なさい、空があんなに綺麗になつて來た。秋になるとね、やつぱり故郷が戀しいの。」

「『弟や妹が、一小隊ぐらいゐて……』でせう。」

「えい、歸つて行つて、草枯れた原っぱで、號令掛けてやりたいわ。」

「小隊長殿は喧しくその可愛い兵隊さん達を叱るのですね。」

「さうぢやないのよ。一人一人抱き上げて、頭を撫でてやることもあるの。でも、もうそんなことの出来る弟妹達は、ちつとしかゐなくなつて、皆大きくなつちまつた。寂しいけど、仕方がありません。」

皆黙つて歩いて行つた。誰の胸にも自家のことが浮んで來たらう。古島さんの自家では、大勢の子供の中に寂しさうな父親の笑顔と、次々に生れ出て來る子供の爲に、ひどく震れた母親の、黒い、荒れ切つた、それでも子供達に着せる着物の針を取つて

ゐる手が、薄暗い電燈の下に、大きな存在として、子供達の心を少しも不安にさせずにゐるだらう。古島さんは、子供が一人前の人間になるのに、その親達を蹈臺にしなければならぬのは、道理であるが、それでも蹈臺になる親達にとつて、それは余り非道いことだと考へた。八人も子供の蹈臺になつて、ひしやばまい、ひしやばまいと、齒を食縛つて、我慢してゐる兩親はどんなに苦しまねばならぬだらう。一度ひしやげて了つたら、もう再び立つて子供達の蹈臺になつて、子供達をより高い所に登らす事も、到底出来ないであらう。古島さんは早くから親達の苦しみを知つてゐた。涙も出ない程に酷使はれ乍ら、高等小學校を卒業すると、すぐ此の病院にやられたが、蹈臺の上の一人が無くなつて、親達の苦しみが少しでも輕くなつたことに對してだけでも、古島さんの心は、躍り上るやうに嬉しかつたのだ。三年立つて、次の弟も、次の弟も夫々どうなり自分自身の職を求めて、親達も少しは樂になつたけれども、まだ、他の家と較べて、小さい子供達が、汚い汚いと言ふやうに、さう富んできたのではなかつた。古島さんも、こんなに陽氣に話し乍ら、活動見に行くなんか、心が咎めて仕方なかつたけれども、變な虚榮から、面白さうに話を交して、歩いて行つた。心の奥の奥には、いつも親達を樂にしてあげねばならない、といふ考へが躍つてゐる。

「ね、山野さん、女と男と、どちらが強いと思ふ?。」

「それは勿論男よ。」

「でも、さうあつさり女は引下がることもないと思ふわ。女だつて強いよ。いざとなつた時の女の強さの例は、いくらでもあつてよ。此の間、ちよつと雑誌の講談で讀んだのですけれど、明治の初め、高橋お傳つてゐたでせう。あの女なんかとても凄いのよ。いざとなつた時には、何人もの男は懷刀で殺してるわ。一番弱いと思つてゐる腕力でだつてさうでせう。い、え、もつとあるわ。私の村で、或る女が、手込めにされやうとしたんですね。その時その女の人がいきなり男を捕へて、投げつけたのですつて。その男は男の中でもさう弱い方ではなかつたんですよ。尤も後でその男が言つたんですがね。畢丸を擲まれたので、どうすることも出来なかつたつて。」

「いやーねえ。古島さんは。」

「でも、女にしても、それくらいは覺悟はしてなくちゃ、いけませんね。膽力にしても、上毛野形名の妻つて、學校で教はりましたね。先代萩の淺岡だつて、さうでせう。さうさう、巴だつて、板額だつて、やはり強い女ですわ。」

「でも、女の中には操を奪はれて、棄てられて、發狂した女もゐますよ。あんなのなんか、慘めな敗北だわ。」

「それは、山野さん、考へ様よ。操を奪はれたつて言ふけど、女にしたつて、その時は男の操を奪つてゐるんですからね。それに男の方は奪はれたことには氣が附かないで、得々としてゐるんだから、猶可愛相ぢやないの。」

「そんな考へ方は自家撞着よ。誰だつてそんなに思ふものですか。」

「他の人はさう思はなくとも、自分だけさう考へればいゝわ。そしたら發狂したり、しないでも濟むのに。」  
「驚いた。オホ、、、、。」

山野さんと、關田さんはたうく笑ひ出した。笑ひ乍ら山野さんは、

「でも、さう言ふ考へ方をしたら、女の貞操なんか、滅茶苦茶になつて了ひはしない?。」

「ちつとも構はないぢやないないの。處女がどうか、かうとか言ふけれども、少しも根據のないことよ。世の中の人は、處女の破り方によつて、又いろ／＼のこと言ふのね。どちらにしても處女でない、と云ふことに何の變りもないのに。」

「古島さん、私は斷じてさうは思ひません。あなたのやうな考へ方は大嫌ひ。嫌なつちまふ。」

「え、どうして!?、怒つたの!。」

「えゝ、そんなことを言ふ人は大嫌ひ?!。」

「まあ!! 御免なさい。ほんとに怒つたのね。」

「もういゝの。それよか、もつと面白いお話でもしませう。」

三人はいつか、葵館の前に來てゐた。そして一番安い切符を買つて中に這入つた。



三人が人込みと、映畫と、噺に酔つて、昂奮して寄宿舎に歸つて來た時は、もう大分遅かつた。重症患者の室だけ、ちよつと人影が動いてゐるきりで、靜か過ぎる程の靜けさだつた。

「あゝ疲れちやつた。」

誰からとなくこんな言葉が口を出て、身體の中迄滲み込んで來やうとする靜寂を拂ひのけやうとしたけれども、口から出た音は、ぎよつとする程高くて、その言葉の尻がすつと、向ふの松の木立に吸ひ込まれて行つて了ふと、獨寂しさがしつとり三人を包んだ。門から、寄宿舎迄は、可成の距離があつて、三人の人は、飽く迄も靜寂を味はなければならなかつた。

一日一日秋が深むにつれて、獨活の病氣は快くなつて行つた。山野さんや、吉岡さん達と冗談許り吐き合つてゐる中にも、宛も笑が病氣を吹飛ばして呉れるかのやうに、快くなつて來た。

「片山さんは何故見えないんですか。」

二三日顔を見ないものだから、獨活はかう山野さんに訊ねた。

「御病氣です。熱がちよつとあつてね」

「重いんですか。」

「さうでもないでせう。何なら今夜一緒にお見舞ひに行きませう。」

「え。」

夕飯食つてから、獨活は山野さんと二人で、片山さんのところに見舞に行つた。獨活がゐる病棟とはちよつと離れた病棟の一室で、片山さんは寂しく微笑んで二人を迎へた。

「どうです、いゝんでせう」

「え。今日はすつと熱が下りてゐます」

片山さんの眼が、山野さんの顔から獨活どくかくの顔に移つて來ると、獨活は妙に震へて、眼を伏せて了つた。

三人は銘々違ふところを見詰めて、ちよつと黙り込んだ。

「片山さん、私、昨日葵館に行きました。」

「さう、それはよかつたですね。面白いでせう、『紅薔薇』つて。」

「え、面白かつたの。可笑しくつて、可笑しくつて堪らないで笑つてゐると、急に泣けて來たりして。」

「私も見に行き度いんですけど。」

「さうね。早く快くなつて、一緒に参りませう。その時は獨活どくかくさんも勿論一緒よ」

「まあ、嬉しう。」

獨活は今迄、二人の對話をちつと聞いてゐる風をして堪えず片山さんの顔を注意して見てゐたところなので、ちよつと、どぎまぎしたが、片山さんがさう言つてこちらを向いた眼を、やはり微笑を以て迎へた。片山さんの頬邊ほばたにはちよつと血の色があつたけれども、前よりは瘦せてゐるやうに見えた。獨活は今迄に着物を來て、お下げに髪を結つてゐるのを見たことがなかつたので珍らしく、又美しいと思つた。

九時頃迄話して、山野さんと獨活どくかくさんは歸つて來た。星が美しく輝いてゐる夜だつた。

雨の降る日は除のぞいて。殆んど毎日、片足のない若い女の花賣りが、各病室の窓の下を訪れた。小さな籠に少し許りの花を入れて、松葉杖をつき乍ら、つゝまじやかに、「お花の御用は御座居ませんか。」と言つて來るのが、獨活には退屈な一日の、一つの喜びであつた。要りもしないのはよく買つてやつた。まつたく、あどけない眸を輝かして、ありがたう、を言ふその態度と聲音が、獨活は、堪らなく好きであつた。そして「可哀相に。あれで脚さへ立派だつたら。」と、その度に思つた。

「どうしたの、脚は。」

と聞いても、花賣は、唯寂しく微笑んで、何とも答へなかつた。

その日は珍らしく、コスモスがあつたので、獨活は、それを片山さんと共に持つて行かうと思つて、二束買つた。そして、すぐ窓の外に今盛んに甘い香を發散してゐる木犀の枝を、花賣りに折らして、それも一緒に花の中に束ねて貰つた。夕飯後、獨活はその花束を持つて、片山さんを訪ねた。

「まあ、珍しい。もうコスモスが咲いてるんですね。おや!?、いゝ香ひがするわ。何でせう? あ、此、木犀ぢやない?、金の木犀ね、ほんとにいゝもの持つて來て頂いて、ありがたうよ、獨活さん。」

片山さんは、すっかり嬉しそうに、花束の中に顔を埋めた。

「獨活さん寂しかつてよ、随分。でもよく來て下さいましたのね。今朝から、何か今日は好い事があるやうな氣がしてゐたんですが、やつぱりほんとだつたわ。」

獨活は唯微笑んでゐた。變に胸騒ぎするのを抑へ乍ら。

「疲れるでせう、そんなに立てると。お掛けなさいな。」

と、片山さんは、ベッドの上に坐ると、その隣りのところを指して、かう言つた。獨活はちよつと躊躇<sup>ためど</sup>つて顔を赧<sup>かへ</sup>くしたが、片山さんの眼がぢつと強制的に見詰めてゐるので、遠慮勝ちに示されたところに掛けた。

「あれから、もう熱は出ないんでせう。」

片山さんは、そつと獨活の顔を横から眺めて言つた。

「えゝ出ません。」

「退院してもよくはないかしら。」

「いゝかもしれません。」

「あなたがゐなくなると、随分私は寂しくなるわ。」

獨活<sup>うど</sup>は眩<sup>くら</sup>しさうに、電燈を振仰ぐと、又俯<sup>うつむ</sup>いて了つた。

「退院しても、御手紙だけは下さらない!」

「ええ。」

「ほんとに!」

獨活が顔くうなづのを見て、片山さんは、そつと獨活うちどの手を取ると、一つ固く握り締めて、

「忘れては嫌よ。ね、獨活さん。」

「ええ。」

「それから、遊びにも来て頂けないかしら?」

「來ませう。」

「ぢや、ほんと来て下さいね。此もお約束してよ。指切りませう。きつと、きつとよ。」

二人は指切りした。そして、どちらからも、ニツコリした。

獨活さんはちつとも此處では、冗談言はないのね。どうしたの。」

「僕は大体がこんな人間なのです。それに、あなたが前より、しんみりしてゐるので、言へないんです。」

「さう、私、しんみりしてゐるかしら。」

「余り病氣を氣にするからでせう。」

「いゝえ、私、ちつとも病氣なんか氣に掛けないんだけど。でもね、一人でぢつとしてゐると、何かなし情無くなつて、死んで了ひさうな氣持になることもあつてよ。」

「寂しいのがいけないのだ。」

「ええ、さうよ。」

「本でも読んでゐたらいいでせう。」

「でも、本なんかちつとも面白くないのよ。」

「人と話すのが好きなのですね。」

「えゝ、人とさへ一緒にゐたら、私は決して寂しがらないんだけど。でも、あなただつてまだ一度きり、遊びに来ないんだもの。」

「ぢや、明日もまた来やうか。」

「ほんとに、いらつしやう。」

「山野さんも、關田さんも連れて来やうか。」

「えゝ、一人で来なくなけりや。」

「一人でも、来ていいのだけれども。」

「ぢや、一人でいらつしやい。」

「やつぱり山野さんも關田さんも一緒の方がいい。」

「煮え切らない人ね。」

「割り切れないんです、一を三で割るやうに。」

二人は、やつとそんなことにも聲を立てて笑つた。

獨活は五度片山さんのところに、遊びに行つた後急に退院することになった。神谷先生が、もう殆んど全快したのだから、退院なさいと、言つて呉れたので。いよく退院すると言ふその前の晩は、月の美しい夜で、獨活は窓邊に立つて、口笛を吹き乍ら、一ヶ月余り住んだ病院への名残を惜んだ。

「獨活さん。いよくお別れですね。」

そこに、かう言ひ乍ら、山野さんが這入つて來た。

「獨活さんはいゝな、早く治つて、僕なんか、もうとても駄目だ。」

「洋村さんは獨活さんのやうに、藥を飲まないで始終外出許りしてるから、それで治らないんです。此から氣を附けて、ぢつとして、藥でもよくお飲みなさい。」

「さうきめつけられると閉口だ。」

と笑ひ乍ら、洋村さんはクルリと向ふに寢返りを打つた。

「獨活さん、此から少しづゝ寒くなるから、風邪を引かないやうに御用心なさいよ。風邪を引いたら、又元に返つて了ひますから。それから、歸つたら、お手紙下さいね。待つてゝよ。」

「えゝ差上げます。」

「美しい月ね。木犀も匂つて。病院もよかつたでせう。名残惜しくない!？」

「えゝ悲しいやうな氣もします。山野さんも、吉岡さんも、關田さんも、どなたも、親切にして下さつて、ほんとに嬉しう御座りました。御禮申上げます。」

「そんなことはありませんよ。私達は唯私達の仕事を忠實にやつただけですもの。」

「山野さんつたら、旨いこと言つてるな。」

洋村さんが向ふ向いた儘、かう言つたので、二人も顔見合せてちよつと微笑んだ。

「体温なんかも時々計つて御覽なさいよ。そしていつもと變つてゐたら、診察にだけでも來るといゝわ。」

「神谷先生の代診が出來らあ、山野さんは。」

「いやあですよ。洋村さん。一々まぜつかへしては。」

「ほんとだから仕方ないや。」

「知りません。獨活さん、こんな人の傍より、もつといゝところに行きませうね。」

「嫉けるよ。」

獨活はちよつと、躊躇つたが、思ひ切つて山野さんについて行つた。

「片山さんどこに行つて？」

廊下に出ると、小野さんは、すぐかう言つた

「えゝ、先刻<sup>さつぎ</sup>行つて來ました。」

「片山さんも、あなたが出て行つて了へば、きつと寂しなりますよ。」

「えゝ、寂しいつて言つてました。」

「私だつて寂しいのよ。」

「私も、内に歸つても、きつとこちらのことを思ひ出して、寂しがるでせう。その時は手紙書いて、その寂しさを紛<sup>まぎ</sup>らすつもりです。」

「では、私もさうませう。」

二人は三十分程、廊下でしみみりした調子で話してから、山野さんは看護室に、獨活は病室に歸つて行つた。

獨活が退院して家に歸つて了つて、二號室には、もう一つ主のないベットが出來た。

獨活がゐなくなると、山野さんは忘れかけてゐた、あの七號室で死んで行つた人、隆子さんのことを、また思ひ出して、苦しみ出した。そんな時、よく關田さんが慰めて呉れてゐた。獨活からも、一週間に一度くらいづゝ手紙が來た。下手な字で亂暴に書いた手紙ではあつたけれども、山野さんにはそれが待たれて仕様がなかつた。

山野さんは、又ちよいゝ片山さんのところに話しに行つて、少しでも片山さんを寂しがらせまいとした。その中に、片山さんの病氣もだんゝ輕くなつて行つた。片山さんの許にも、獨活の手紙がよく來てゐた。

關田さんの様子が段々變つて來て、山野さんは、むしろ悲しいやうな氣持で、それを眺めねばならないやうな事になつて來た。快活で、ちよつとしたことにもよく笑つたりした人が、沈んだ眼でよく一點を見詰めるやうになつて來たのだ。

「關田さん、此頃、變に顔色が悪いやうよ。病氣ぢやないの？」

「いゝえ。」

「何か心配なことでも、あるんぢやない？」

「いゝえ。」

沈んだ眼を上げて、寂しく微笑む關田さんをちつと見乍ら、山野さんは、此の人は戀を知つたんぢやないかしら、と考へても見た。そしてそつと此の人に来る手紙やなんかに、注意してみたけれども、そんなことには何の變化もなかつた。

「やはり、病氣かしら。」

けれども、關田さんは決して、仕事を怠つたり、仕事に疲れたりするやうなことはなかつた。

一夜よく話し合つて、此頃の關田さんの變つた心持を聞いて見たいと思ひ乍ら、妙に掛違つて、それを果せないのを残念に思ひ乍ら、山野さんは、故郷の海邊の家に、二週間程休暇を貰つて、歸つて行つた。蘆屋根の下に歸つて、子供のやうな和やかな氣持で、短い二週間を送つた。一年に一度か二度、さう云ふ愉快的氣分を味はへるのを、山野さんは、非常な幸福だと思つていつも暖い愛情で体中を包んで呉れる、祖母、父母、兄弟に、心ひそかに感謝してゐた。

潮風に清められてゐる村は純朴な村である。山野さんは我乍ら、余り自分の着物のけぼしさに、照れるやうに、その村の人達は地味であつた。實際、村の若い娘達は、どんなに美しさうな眼を以て、此の純朴に浸り得るといふ喜びを抑へかねて歸つて來る人の着物に注いだことであらう。日に焼けた、健康そのものの顔をどんなに輝かして、都會に對する憧憬を高めたことだらう彼女達は自覺を持たないのだ。塵埃の一杯立ち籠めてゐる都會、しかも、その中に住んでる人々の心の中迄も塵に汚れてゐさうな都會より、此の清らかな漁村の方が、どれだけいゝか、白粉に荒れて、かさ／＼した皮膚よりも、日に焼けて、健康な顔



の方がどれだけいゝか、彼女達は知らないのだ。そんな雰囲気の中に、二週間でもいい、住むことの出来る山野さんは幸福である。毎日毎日に病める人のみに接して身體も精神も、少しづつ頹廢的になり掛けて來てゐる山野さんにとつて、此の自然は何よりの醫藥であつた。朝起きて、撥釣瓶はつりびんで水を汲み上げ、顔洗ひ、磯臭い大氣を二つ三つ大きく呼吸すると、昨夜迄の疲れ等、煙のやうに消えて無くなつてゐた。病院の露臺に立つてする深呼吸など、及びもつかないやうな新鮮味があつた。

姉と嫂と共に、家の傍にある畠を耕したり、祖母の冬の袖無しを縫つたりしてゐる中は、關田さんのことも浮んでは來なかつたけれども、夜、床に就いた時だとか、夕飯を終つて、縁端に出た時、月が美しく、咲き遅れたコスモスの花が風に搖れたりしてゐる時等には、後から後からと、關田さんのことゝか、片山さんのことだとか、獨活のことだとか、が浮んで來ては消え消えした。その中でも、どうしても關田さんのことが氣に掛つて仕様がなかつた。何度も、手紙書かうと思つたけれども、薄暗い電燈の下では、到底ペン執らうなど云ふ氣になれずに、その儘延び延びになつて了つた。歸つて一週間餘経つた時、獨活の手紙が病院の方から廻つて來たが、それにも返事書かなかつた。すると、それから三日許り立つて、思ひ掛けなく、片山さんから手紙が來た。變だ、と思つて封を切ると果して大變な事が起つてゐた。

「.....こんなお便りを差上げるとは、私も大へん悲しいんですが、涙を拭ひ拭ひやつとこれだけ書きました。」と結んで、關田さんが、或温泉町で毒を仰いで、自殺したことを一通りさつと書いてあつた。

薄暗い夕暗の縁端で、その手紙を讀んで了ふと、山野さんは、失神したやうに、焦點の崩れた眼を庭の隅の方に据えて、動かなかつた。さうした時間が、どれだけ立つたか知らないけれども、山野さんは、はつと自分に返ると、「關田さんは、遂に死んだのだ。」と呟いたけれども、どうしても、それが嘘のやうで、信じられなかつた。

「と言つても、確かに關田さんは死んで了つた。私には默つて、さう唯默つて死んで行つて了つた。」と考へると、堪らなくなつて、顔を兩手に埋めて了つた。

山野さんは翌朝早く、和やかな村を出ると、忙て、町の病院に歸つて來た。そして、室長から悉しく關田さんが死んだ前後の

ことを聞いた。

關田さんは、山野さんが休暇を取つてから五日目にやはり、休暇を取つて自家に歸つた。自家とは言つて來たが、さうでなく、男の許に行つたのだらう。關田さんの自殺は心中だつたのだ。

歸つて行く時には、そんな氣振など、ちつともなかつたさうである。

山野さんは、關田さんの遺書だと言つて、一通の封書を受取つた。山野さんは、やつとその時、關田さんの死因を知り度いと云ふ餘裕を持つことが出来た。

「美津子様、私の大事な大事なお友達、否、お姉様こんなお手紙を書き残さねばならない私の境涯を、どうぞ悲しまないで下さいませ。私は幸福なので御座居ます。」

美津子お姉様、何時か私がお話し申上げたHのこと、あれは嘘だつたとお思ひになりはしないかしら。私はそれが一番怖ろしいので、此の手紙を残したので御座居ます。實を言ふと、あの時は、慥かにあんな氣持で居りました。あなたに、あの時、戀ではないかつて言はれて、それから私も考へてみましたの。でも考へれば考へる程、分らなくなつて、或る日、Hに逢つて、尋ねてみたので御座居ます。すると、いきなりHは私を堅く抱き締めて、私の耳の傍で微かな聲を震はして、戀だ、ほんとは戀だつたのだ、と呟きました。私はどうすることも出来ずに、Hの爲すが儘になつて居ました。

私が泣き乍ら、疊の上につゝ伏してゐましたらHは、

『私は私の心を迄も欺いて、あなたの關係を、唯仲の好い友人だと思つてゐました。けれども私のほんとの心持を考へてみるとやはり戀だつたんです。私が全く弱かつたからなのです。私は戀せんとするならば、唯あのN子——御存知でせう。此の間打明けたあれです。——より外の誰ともしてはいけないのです。もし、それを犯してでも、他の人と戀したら、その戀は大きな不幸を齎すのです。その不幸を歎く父母の痛ましさと、その不幸を呪ふN子及び、その家族のことを思ふと、私はもう堪らなかつたのです。そして猶その上悪いことは、そんなに弱い癖に、私には妙な依固地さがあつて、若い男と若い女が、少しでも友情を持合

つて、話を交したり、手紙のやりとりをやつたりすれば、それを戀愛關係——しかも、肉体的交渉——だと信じ込んで了ふ、古い人達、殊に私の兩親への、一種の反感から、あなたとの關係は清い友人であると、無理にも、自認してゐたからなんです、皆、私が悪いのです。間違つてゐました。先日、N子との結婚式を舉げてはどうか、と家人から勧められた時、私はあなたとの關係が、やはり男と女の關係であることを、嫌でも認めねばならなくなりました。」

私はその時、何か大きな鐵の棒を口から腹の中へ押し込まれたやうな、氣持がしました。そして耳の聲が私の耳の傍で、  
『ね、死にませう。一緒に死んで下さい。』

と囁くのを、何か美妙的な音樂の音のやうに聞いて、譯もなく頷きました。

その日から今日迄、何度かその考へを變へましたけれども、やつぱり二人は死ぬより外に仕方がない、それが一番幸福なことだといふ考へになつて了ひました。もう此の考へは動かさないんです。

それは今美津子姉様にお別れすることは、つらい、實につらう御座いますけれども、あの死んだ先の世、不老不死だといふ、あの世で、又御一緒に仲好く遊べるのだと思ふと、却つてその方がいゝやうな氣さへします。」

山野さんは、此處迄讀んで來ると、もう涙がすつかり乾いて了つて、自分だけ取殘されたやうな寂しい、心持になつた。そして、その心持の中には、驚に攪はれた油揚げの殘惜しさがあつた。

「さうだ、私だつて關田さんを愛してゐたのだつた。戀愛とは言へないかも知れないけど、それに似た愛情を抱いてゐたのだ。」

それから二三日して、關田さんの葬式が細かに營まれて、山野さんは又別な新しい涙を吞みながら、關田さんの靈に香を焼いた。

その夜山野さんは床に這つても直ぐには眠れずに、こんなことを思ひ續けた、

「關田さんは、でも、幸福なのだ。あんなに一筋に愛を持ち續けて、それをあの世迄も持つて行つたのだもの。それから、あの

隆子さんの死も美しかった。しかし私だけが、何の色彩もなく、灰色の醜さで、此の與へられた。けれども處々に黒い汚點のついた肉体を守つてゐる。あつたらぬ。こんな肉体なんか、早く棄てゝひたい。そして二人のやうな、清淨な元の姿に歸りたい。」

山野さんは、微かに肩を震はしながら、噤泣<sup>ひびなき</sup>を始めた。

「けれども、私には到底、死ぬなどいふことは出来ない。考へただけでも恐ろしくて、身震ひがする。」

その時、山野さんの頭には、信仰の二字がありありと表れて來た。此の前隆子さんが死んだ時に思つた、うすぼんやりした信仰が、爰ではつきりとなつた。唯さう憧れるのみではなく、實際、實行の計畫を立てた。

病院の中では、其處にも此處にも、關田さんの噂で持切つてゐた。山野さんは、なるだけそんな噂を聞くまいとした。關田さんの眞の心持とは、随分かけはなれた批評が、遠慮なく曝け出されてゐるのを、聞けば聞く程腹が立つて來るので。中には、あれは、女の方が欺されたのだ、といふ者もあつた。

山野さんは又、古島さんの感想も聞かされた。

「死ななくてもよかりさうなものだつたのにね、死んで花實が咲くものか、とも言つてあるわ。折角人間として生れて來たものもつと人生を享樂しなければ嘘よ。漸く花が咲いて、戀人が出來たと思つたら、もう花瓣が落ちて了つてゐる。といふの等、嫌です。それに關田さんの場合は、その花だつて、まだ充分に開いたのぢやなかつたもの、可哀相だわ、まつたく。あの男が悪いのよ。まだやつと開き掛つた書を無理に開かして、そして筆を取つて了ふ等、ちと残酷過ぎる。ね、山野さん、さう思はない？ 花はぢつと、自然の儘に放つて置いて、そして開いたのが、ほんとに價値のある花よ。温室で開かした花等、ほんとの花ではないわ。兎に角、自然のなすが儘に、何の修飾も施さずに、生地その儘で開いて、そして實を結んでこそ、初めて生甲斐があると云ふのぢやない？ その意味で、人間もありの儘の本能を伸ばさなくてははいけない。宗教にも道德にも、社會的の制裁にも拘束

される必要はありませんわ。唯、只管に、本能の中に溺れ込んで行けばいいのよ。溺れまいとするから、薬を掴んだりするので。關田さんの場合だつてさうよ。薬を掴んだのだわ。そして、その薬が、少し強過ぎて、たうく二人を引上げて了つたのだわ。それがですね。薬がもつと強くて、二人を、本能の淵よりも、更に悪い淵を越える迄に切れなければよかつたんですがね。それだけの強さがなくて、切れて了つたのよ。薬でもうっかり掴めないのね。大變なことになつて了ふわ。」

山野さんは、ちつとそれを聞いてゐたが、心の底から湧き上つて來る反感を覺えた。寧ろ、悲しかつた。此迄も、いろく、古島さんの考へと、自分の考へが喰ひ違つて、氣拙い思ひをしたことがあるけれども、此の時程憎惡を感じたことはなかつた。それが、他の人の心中に對する批判であつたのなら、こんな怒りは起らなかつたかも知れないけれども、その魂を自分の中に抱いてゐる關田さんのことに就いてゐあつてみれば、勢ひ非常に腹が立つた。

「古島さん、止して下さい。何故そんな考へ方をするんです。」

古島さんは、いつに無い、山野さんの眞剣な怒りに撃たれて、たちくとなつた。そして、人中で揉まれてゐる中に、だんく覺え込んだ。狡猾さで、こんな場合、どんな態度を取ればいいか、をよく辨へてゐたので、

「ほ、又怒られたわ。御免なさいね。今の、唯の冗談よ。」  
と直に引下つたのだつた。

午後である。

山野さんは、救はれ難いやうな、重苦しい心を抱いて中庭の芝生の上を、あつちこち歩いてゐる。

「私だつて、死ぬたらそれが一番いいのだけれど、死ぬことは、怖ろしい。死といふことの美しさを、泌々と感じてゐるから、私は其處に行けないでゐる。其處迄行く道の險しさに、唯もう心から快え切つて了つて、他の、もつと平坦な道を選んで、それが違ふところに、死と同じ潔癖なる美の満足を求めやうとしてゐる。そしてその平坦な道が、いくつも、いくつもありさうな氣

がする。瞬時も早く、今迄歩いて來た道——古島さんが、先刻、あれ程、痛烈に指摘した道、を抜け出やうとしてゐる。先刻、あんなに怒つたのも、實は自己に對する攻撃でもあつたのだ。しかし、どうしたと云ふんでせう。私は人の死を讚美しながら、自分の死を否定してゐる。否定しまいとしながら、否定を強ひられてゐる。私にはすつかり分らなくなつて了つた。さうく、神谷先生だつたら、教へて下さるだらう。それに、死への道が怖ろしくて行けない時、他の平坦な道は、宗教への道であらうか即ち信仰への道であらうか、それも、教へたい。私には、その道を選ぶことすらも怖ろしい。私自身に對する批判の標準が根底からぐらつてゐる。全く盲<sup>めくら</sup>ひてゐた眼が、少し宛開きかけて來て、見える世界は皆薄暗の中に包まれて定かには、見えない今迄の暗黒の中にゐた時は、勿論光の存在も知らなかつた。しかし己自身が歩いて行く方向は、唯一直線に定まつてゐた。私の中には、常に北を指す磁石があつたのだ。それで充分幸福であつた。少くとも魂だけは些かの動搖もしなかつたのだ。それがどうでせう、一度、暗の外に光があるのを知つた時、磁石は、もう北のみを指さなつた。氣儘に、グル／＼廻り出したのだ。それと一緒に魂も廻るのだ。でも元の北では無くて、磁石は、更に、最も光に多い方向に一定しやうと、急<sup>おそ</sup>つてゐる。」

山野さんは、いつかしら、芝生の上に座つて既に生活の作用を止めて了ひ掛けた葉を、筆つては棄て棄てしてゐた。冬籠りに忙がしい小さな赤蟻が、せかせかと、何度も山野さんの赤い羅紗のスリツパの上を横切つた。夏の間、あの嫌であつた、草の間を息<sup>いき</sup>急<sup>いそ</sup>ぎ、息<sup>いき</sup>急<sup>いそ</sup>ぎ、もぐり歩いてゐた黒い毛のある虫は、もう何處かに姿を隠してゐる。

ふと、山野さんは顔を上げて、あたりを見廻した。すると、向ふの梅の樹蔭に一匹の犬が、例にないおどおどした様子で、こちらを見てゐる。リーベード。

「まあ!!リーちゃん。」

しかし、犬はすぐには飛んで來ない。

「リー、リー。リーつてば。何故來ないの、おすぞ。」

何と言つても來ない。

たう／＼山野さんな立上つて、自分の方から近寄つて行つた。近寄られると、犬は急に後を向いて、逃げ出した。苦しうに跛を引き乍ら。

「どうしたと云ふでせう。あら、跛を引いてる。それに、大きな針金迄引張つて。可哀相に、誰がしたんだらう、一体。又先生達が實驗する爲に捕へて、あの針金で縛つたのかも知れない。嫌なことばかりするわ。それに後肢を縛りつけたらして。それをリーが無理に引切つて來たのだらう。ぢや肢の方を怪我してやしないかしら。」

犬はやつと床の下迄、逃げて行つた。そして疑深くこちらを見詰めてゐる。

「あんなことするから、あんなに怖け切つて了つたんだわ。あんなに、嫌な卑屈な眼をしてる。」

人に對してさへ、随分非道い態度を取る先生だもの、犬ぐらい何とも思つてやしないのだらう。比處に來てゐる人達の中でも大分、春を弄ばれて泣いた人もゐる。山野さんだつて、泣きはしなかつたけれども、今開きかゝつた眼に、呪ふべき人として映する男の中の一人は、それ等の人の中の一人である。今あの犬が持つてる、怖れと卑屈との眼は、魎で呪咀の光を帯びて來るだらう。その時の眼が、泣かされた人達が、先生達に向ける眼である。

でも、神谷先生だけは感心な人で、よく冗談やら皮肉やらを打つけるけれども、嘗てそんな噂を聞いたことがない。山野さんは、いつから、神谷先生は、信頼していゝと、信じてゐた。

うら悲しい病院の秋の夜が訪れた。もうその末期に近付いた、あの甘い木犀の香が、しつとり空氣を濕してゐる。動くことを奪はれて、白いベツトの中に包まれてゐる人々に、赤茶けた電灯の秋の夜は、それが長いだけに、陰慘な影を投掛ける。

山野さんは當直で、ぼんやり椅子に腰掛けた儘、猶思ひを馳せてゐた。

あの時は、只管に信仰へと思つた。けれども、それが果して自己を救つて呉れる道かどうか怪しくなつて來た。自然の行爲——誰が不自然だと言ひ得やう、——を爲して來て、それを苦しんでゐる此の小羊を、安らげく眠らせ得るだけの根底が、信仰にあるかどうか。しかも、此の小羊は死を讚美してゐる。自殺を認めてゐる。一度の自然の行爲が、一つの汚點、しかも永劫消失し

ない汚點だと考へてゐる。他に何等の希望も無くなつたら、此の小羊は安らかに自己を永久に眠らすであらう。

「何をぼんやり考へ込んでゐるんだ。今度は若い燕でも喰へ込んだといふやうな圖をしてからに。」

「あら先生!!」

「先生もないもんだ。今から逃げられた後の心配でもしてるのかい。」

「馬鹿を仰有り。そんなのぢやありません。」

「ほほう。大した權幕だぜ。驚いて了ふよ、そんな眼で睨まれると。」

「私、今夜は、ほんとに眞劍なのですから、どうかそんなに茶化しないで下さいまし。」

「おや／＼、さう出られると、いよく／＼皮肉りたくなるなあ。」

「少しお話しが御座ぬますけれど、聞いて下さらない?」

「助けて呉れと言ひ度くなるよ、こんなところで口説かれちゃ。」

「.....」

「おい、もうさう睨むのだけは止して呉れ、身が縮むやうだ。よしよし、その代り話は聞いて上げやう。」

神谷先生は丁度當直で當直室に一人ぼんやりしてゐるより、冗談でも叩き會はうと、かうして看護室にやつて來たのだつたが、例に無く山野さんにかう眞劍に來られると、此は何かあるのだな、と思つて眞顔になつた。

「さあ、どんな面白い話かしらないが、承らうぢやないか。」

山野さんは、今迄心に映じたことを、皆可成り要領よく打明けた。話を聞き乍ら、神谷先生はだん／＼眞劍な態度になつて行つて、初めの中は、軽い皮肉で混ぜかへしてゐたが、後には、うんとも何とも言はず、唯腕を組んだ儘、黙つて聞いてゐた。長い話がやつと終つた時は、いつか山野さんと同じ昂奮に驅られてゐた。

「それで、私信仰に這入つてみたいのですけど、どうでせう。」



山野さんの眸は焼きつくやうに、神谷先生の口に注がれてゐた。

「とても難かしい問題だね。僕には少々、重荷過ぎる。しかしだね、山野、此は僕自身の意見として言ふのだから、その心算にしてゐて呉れないと困るよ。先づ、關田の心中の問題だがね、君は、あれの死を大變美しい、絶對的のものとしてゐるやうだが僕には賛成出来ん。成程、自己の戀愛を、男に對する從順により、貫き通した點は、君でなくとも、悪い氣持はしないね。僕にしたつて、そんな女と一緒にすることは幸福かもしれない。しかし、自己の戀愛を生かすだけの努力を拂はなかつた、と言はれても、關田には一言もあるまい。君は、肉体を減ぼして、それで猶戀愛が成立すると思つてゐるのか。肉体から彷徨<sup>さまよ</sup>ひ出た魂が固く結びついてゐるとしても、それを戀愛と言へるか。君は再びその日と云ふ男の誤謬を繰返さうとしてゐる。男はやはり、君のやうな、ロマンチストだつたのだ。しかし、後で氣が附いたぢやないか、戀とは如何なるものであるかと云ふことを。男女の性を超越<sup>セックス</sup>した愛が、果して戀愛と呼ばれ得るものであらうか。男女の性を言へば、此は皆、肉体に歸して了ふのだ。僕が醫者だからと云つてかう言ふのではないけれども、男が男らしい、女が女らしい感情を持つてゐると云ふのは、皆生理的原因から來てゐる。で、戀愛が、性<sup>セックス</sup>と云ふ條件を具してなければならぬのなら、戀愛は性慾を修飾したものだ。戀愛の歸結が、結婚——言ひかへると、肉体的交渉だね、——に落付かねばならぬことは、此は當然ぢやないか。ところで再び關田のことに歸るが、あれで戀愛を生かした。と言へるか。それや勿論、死ぬ前に肉体的交渉のあつたことは認めねばなるまいがね、その次に、も一つ考へねばならぬことは、我々は、我が一代を充分に生き通したらそれでいゝかといふことだ。勿論よくはないさ。次の時代に生きて行く人々のことを、考へねばならない。我々が、親その親、又その親からと、だん／＼に受繼いで、我々のところ迄やつて來た、生命——此の生命は永久性を持つてゐるんだ、分るだらうね——その生命を次の代に譲り渡さないで、自分一人で抹消して了つてそれでいゝか。よかないさ。我々には皆子供を遣へねばならぬ。爰で造物主の偉大さに驚くんだね、性慾は實に、その生命の永久性を保証するものだ。誰が性慾なくして、厄介な子供を脊負つて歩くものかね。此處迄言つて來れば、關田の自殺それから君の自殺承認が、誤謬であることが分つた筈だ。僕はだね、世の道學者達が自殺は罪惡だと言つてゐるやうに、そんなに冷た

い鐵窓の中には、此を入れたくないんだが、造物主即ち神に對して、果して、敬虔な行爲であるかどうか、考へて見給へ。よく分ることだらう。此は一個の科學者として言つたんぢやないがね、科學的に言つて果して神が存在するかどうか、と云ふことは問題にならないんだ。従つて、敬虔等云ふ言葉も消失する譯だね。しかし如何に科學的にと言つたところで、科學者にも、良心はある。今迄何百萬年が知らないがね生存し發展して來た。地球上のあらゆる生物の生命を斷つていゝと云ふものがあるかね。此で、自殺の方の鼻は附いた譯だね。どうだね、山野。得心が入つたかい。」

「えゝ、ありがたうございました。よく分りました。それで、思ひ出しますが、佛教の方でも、自殺は悪いんですね。自家のお祖母さんがよく言つてましたよ、『あの世からお迎ひが来る迄は死んではならない』つて。」

「それやそうさ。こちらから押掛けて行つても閻魔様が、まだ通すには早いと言つて、通して呉れなければ仕方ないものね。」  
二人はやつと、氣輕な笑ひを洩した。

「それから次は、君が信仰に入ると云ふことだがね、その動機と云ふのは、君の肉体が汚れてゐるのが、穢らしいので、それから脱したいと云ふのだらう。山野らしい考へ方だ。ところで、僕が、肉体が汚れてゐると云つても、先刻言つた、生命の延長と云ふ方から考へると、當然の行爲ではないか、神の思召に頗るよく適合した行爲ではないか、と突込んだら、君は何と答へる？」  
「私はそんな考へ方は嫌ひです。それでは先生、全で犬猫と同じぢやありませんか。私だつて人間ですもの、犬猫のやうな野合を以て、唯一の性慾とはしたくありませんわ。先生が先刻仰有つたやうに、その性慾に、美しい着物を着せて、頬丹つけて、やりたう御座居ますわ。」

「成る程、さう分つてゐて貰へば、もう安心だ。しかし、やはり山野式のロマンチズムだな。どうだい、白粉つけて、紅つけたその性慾とやらを、見して呉れんかい。」

「いやあね、又先生の十八番が始まつた。」

「よし、ぢやもう少時、藏つとく。」

「それにですね、先生、私が汚點だと云ふのは、何も体の交渉をのみ意味してるんぢやありませんわ。私が苦しいのは、やはりその交渉が犬猫のそれと等しく——いや、もつと劣つてるかも知れませんが——全くの野合なのです。しかも、節操のない野合なのです。殆んど戀愛の無い野合なんです。さつきは偉いこと言いましたけど、もうどうしても取返しがつかないんです。全くの暗黒の中に住して、磁力が北のみを指してゐた時の出来事ですもの、何が何だか、ちつとも知らなかつたんです。」

「おい、おい、ちよつと待つた。その『暗黒に住して磁石が北を指して』ると云ふのは一体何だい。」

「お分りにならない。私がね盲目でゐた時に、勿論心ですよ——私は、唯眞直ぐに行く私の道を知つてたんです。そのことですわ。」

「よし分つた。」

「私の汚點がもし戀愛の結果のそれであるといふのでしたら、先生の前にも大びらで、お話し出来るんですけど。」

「何を言ふ。君は處女の清淨をあんなに憧れてゐたんぢやないか。そんなこと言ふと、君のお化粧した性慾の人形の口が大きくなるぞ。その人形は、成るだけ小さい口で、沈黙を守つてゐる間が美しいのだ。大びらで話してもされたら堪らん。」

「悪う御座居ました。一度開いた人形の口を、私はもう二度と開かないやうに、しませう。」

「でも開くべき時には開かねばいけない。ところで次は、彌々御質問にお答へするのだが、此には俺は何とも言へない。君の思ふやうにしたが一番いいと思ふ。君はその道が、君の満足する場所に通じてゐるかどうか分らないと言つてゐるが、君の求むる満足は、そんな見通しの利かないやうに先にはない筈だ。近いところが、僕だつて満足さして上げられさうだ。何だと思ふ？」

「分りません。」

「結婚さ。どうだ、驚いたらう。君の考へは、もつと早く此處迄來ねばならなかつたのだ。」

「でも先生……」

「何だ。」

「先生が……。」

「まあ、冗談にして置かう。例へばの話だよ。君の人形だつて、今に口を閉ぢたばかりのところぢやないか。ところで、ともう何時かい、晚いんだね。そろそろ御興を上げないと、椅子とくつゝいて了ひさうだ。ぢや、さよなら。」

「いろくゝとありがたうございました。」

廊下に出て見ると、外は綺麗な月夜であつた。神谷先生は、ふと立止つて、中庭に面した窓ガラス戸を一枚開けて、月を仰いだ十三夜余りの月である。

「山野、ちよつと来てみんか。綺麗な月だよ。」

深夜がその聲に震へた。

「はい。今直ぐ。」

山野さんは、ちよつと居住ひを直して、出て來た。

「随分綺麗な月だね。それに、第一空がいゝ。」

「秋の空と言つてね。」

「それは、皮肉かい。」

「いゝえ。」

「僕に惱みを疊して呉れといふことか。」

「……………」

「君、僕は魂迄も醫す、醫學は教つてないからね。」

「先生!!でも先生は、御自身の魂だけはお治しになれませう。」

「それやね。」

「お治しにならぬといけません。」

「何を言ふ？」

「……………!!」

「木犀の香つていゝものだな。全く山野式の香だ。」

「先生!!」

「いゝよ。よく分つた。磁石が北を始終指してゐた、あの暗黒時代のことは、お互ひに忘れて了はうね。どうせ暗だ。見えはしないことだ。」

その時、山野さんは、向ふの床下から出て来る犬を見付けて、握られてゐた手をそつと放して、その方を指した。そして言つた。

「先生、あの犬のやうな眼に、私の眼をしないで下さいな。」

「何か又、難かしいこと言ふね。」

「でも、あの犬の眼御覧にならないからですわ。あんな、おどおどした卑屈な眼つて、あるものですか。」

「君は僕を信じてゐる筈だ。」

「えゝ、でも……………」

「でも、何だい。まだ此でも愛し足りないと言ふのか。」

山野さんは遅ましい腕の中で、熱い涙を零してゐた。

犬はもうリーとも呼ばれずに、おど／＼し乍ら食物を捜して歩いてゐた。

次の死に對しては、もう山野さんの地盤は固つてゐて動かなかつた。それは片山さんの死である。何かしら、一杯の希望を抱いて、ずん／＼快くなつて來てゐたのに、急に又元に振返して、遂に再び立つ能はずなつた。

山野さんが見舞ひに行つたのは、その前の日であつた。その時、山野さんは、三年間の經驗で、片山さんが今どんな危険な位置に立つてゐるかを、はつきり知ることが出來た。もう快くなつて、からどうとか、かうとか言ふやうな、氣休めは、到底言へなかつた。

二人は唯黙つて手を取り合つた。去つて行かうとしてゐる魂を、少しでも、引止めて置いてやりたいと言ふ一人の思ひと、希望を失つて、もう此以上の生を願つてはゐないけれども、此の手によつて、少しでも、自分が存在してゐたと云ふことの記憶を傳へんとする他の一人の思ひがお互ひに暖かく流れ込んだ。

「ね、山野さん。聞いて下らない、私の最後のお話しを。」

「えゝ喜んでお伺ひしませう。けど、最後なんか云ふ言葉を使つてはいけません。」

「えゝでも此が最後のお話しです。そして最初の。私は、此だけはあなたにお話ししとかなければ、死ねません。ね、聞いて下さい。私ね……」

「何？遠慮なんか無しよ。」

「言ひますわ。私ねあの獨活さんね、あの人を戀してゐたんです。えゝ、でも口にはさう出しませんでしたわ。此間、ちよつとあの人が遊びに來たんです。そして話してゐる中に急にあの人が、私の唇を求めたのです。私はすっかり驚いて了つて、本能的にとでも言ひますかね、凄く拒絶したんです。そしてその直ぐ後で失敗しまつた、と思つた時は、もう遅かつたんです。あの人は蒼白な顔を歪めるやうにして、『さよなら、永久にだよ』と言つて、逃げるやうにして、出て行つて了つたんですわ。呼び止める隙も何もありはしなかつたんです。で、すぐ手紙書きましたわ。けれども、何の返事も呉れないんです。私は何日、それを待つたでせう。どんなに泣き乍ら待つたでせう。けども、たう／＼來ないんです。ね、山野さん、濟みませんけど、何かの機會に此を獨

活さんに渡して下さい。そして、良子は死ぬ迄、あの人のことを思つてゐたと傳えて下さい。」

「承知しました。確にお届けしますわ。」

と山野さんは、片山さんから一通の手紙を受取つた。

秋ももう大分更けた。

夜の芝生は、もうとても寒くて、冬の準備でもしてない限り、さう長いことは行めなかつた。しかし、山野さんはもう先刻から佇んでゐる。

片山さんの死を靜かに悼んでゐるのだ。哀憐の涙が、止度なく奔り出る。たゞこれだけの世界である。山野さんの中には、今片山さんの外に、何物もない。倚掛つてゐる梧桐も、踏みつけてゐる芝も、病棟も、關田さんも、神谷先生さへも。傍迄、食物を求める爲に、下ばかり向いて、山野さんの存在を知らずにやつて來たリーベも、ない。唯、見よ!!奔る涙を、浴び乍ら、磁石が、あの廻轉してゐた磁石が、動かない、動かない!!